

長崎伊王島沖のテーボル号

開港ひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/平成3年10月10日
印刷/有三信印刷所
横浜市広報印刷局登録第020055号 類別・分類C-BE160

生誕二五〇周年記念

『R·H·ブラントン』展特集

R·H·ブラントンの遺品

日本における草創期の洋式灯台建築と明治初頭における横浜のまちづくりに大きな足跡を遺したブラントン(Richard Henry Brunton [1811-1861])の遺品については、かつて本誌第九号で紹介したことがある。昭和六十二年、ブラントンの御令孫ウォーホップ女史から当資料館に寄託されたもので、ブラントン旧蔵写真帳、ポートレート、結婚証明書などから成る。第十九号で、ブラントン夫妻として紹介した写真は、その後ウォーホップ女史に確認していただきところ、男性はブラントンの義兄で、灯台寮の書記兼会計役でもあつたジョージ・ウォーホップであろうとのことであった。

この場を借りて訂正します。上に掲げる絵は、先回紹介できなかつたもののうちのひとつで、灯台視察船テーボル号である。テーボル(Thabor)は灯台視察船としては二代目、一八七〇年仏国郵船会社から九万ドルで日本政府が購入した外輪船で、ブラントンお気にいりの視察船であった。テーボル号については、船舶諸元(船長百

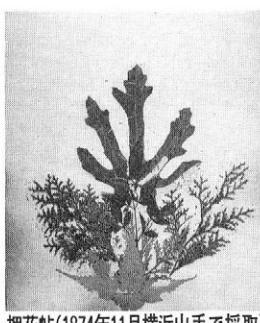
九十四フィート、全身重量八百トン等)は判明しているものの、台帳等は紹介されたことがなく、写真等は紹介されたことがなく、本図が最初の公開になろう。構造はおそらく長崎湾を出るテーボル号で、右手の島上の灯台は伊王島灯台(一八七一年九月十四日本点灯)である。左下にOCHI-YAI, NAGASAKI, JAPAN右下にPAINTERとあることから、長崎の洋画家落合素江(一八三一~八五)が描いたものと思われる。

いまひとつこの遺品は、一昨年当館が実施した英国でのブラントン関係資料調査の際に、ウォーホップ女史が当館宛に託したブラントン旧蔵押花帖である。土産用写真アルバムに似た体裁で、"FERN AND FLOWERS / JAPAN / 1874"と題されており、八十三枚にわたって各地の主としてシダ類が集められている。最も古いものは一八七一年十一月十七日東京王子で採取された「紅葉」、また一時帰英(良)

門外漢にとって植物学的な価値を見極めるのは難しいが、ほとんどものに採取地と採取年月が記されており、ブラントンの行状をある程度追跡できることが有難い。卷末部には水彩画の他に説明書が添付されていて、それによると、一八七四年八月二十日から十月三日にかけてのテーボル号によるクルーズ(横浜→下田→鳥羽→樫野崎→神戸→大阪→瀬戸内海→下関海峡→長崎→鹿児島・山川→島原→日本海→函館→仙台→横浜)で採集されたものが中心になっている。ブラントン夫人が大切にしていたと伝えられるところから、ブラントン夫人の製作になるものかもしれない。



押花帖の水彩画



押花帖(1874年11月横浜山手で採取)

R・H・ブラントンを語る

——大槻貞一氏に聞く——

一八六八年にお雇い技師として来日し、日本の灯台建築と横浜のまちづくりに大きな功績を残したイギリス人、R・H・ブラントンの生誕一五〇年を記念した展示を一〇月一〇日から、横浜開港資料館で開催いたします。展示にちなみ、日本ブラントン協会の発起人で、産業考古学会常任幹事でもある大槻貞一さんにお話を伺います。

——大槻さんは、日本鋼管株式会社にお勤めのころ、「パイプの博物館」をお作りになり、主宰されていましたが、開館はいつだったのですか。

大槻 一二年前に東京の玉川上水の木樋を収集し、次に石川県金沢の辰巳用水の石管を集め、しているうちに自然発生的にパイプのミニ博物館ができました。横浜の煉瓦造下水道管も寄贈していただきました。

——ブラントンに関心を持たれたきっかけも、パイプの博物館と関係があるのですか。

大槻 上水道の管や下水道の管、パイプ構造物などを調べていると、行く先々でブラントンに行き当たるのです。ところがブラントンがもたらした新技術については、案外知られていないことが分かってきたのです。私はかねがね、技術が向上普及すれ



大槻貞一氏

——幕末から明治にかけて、いろいろな文物が流入した横浜でも、技術史についてあまり気を使われていませんね。そこに義憲を感じたのも、ブラントンについて調べようとしたきっかけの一つです。

大槻 私とはパイプの博物館の頃からの知り合いでした。残念なことに去年亡くなられました。

——早稲田さんと言えば、「トーマス・ウォーレスの手記」のこと、思い起

——ブラントンについては、灯台に関する話題では常に取り上げられても、技術と

いう総合的な面ではなかなか取り上げられないということですね。

大槻 出来上がった結果だけを問題にして、できた理由を研究しない。横浜開港の時にはヨーロッパでは、産業革命が進行していく、いろいろな新技術がどっと流入してきたのが横浜ですが、横浜の人は、案外そのことを知りません。ブラントンがやった居留地下水管や、マカダム式舗装について言い出したのもごく最近です。

——ブラントンの研究と言えば、大槻さんとも関係の深い早稲田稔氏の名も忘ることはできません。早稲田さんは、横浜市の下水道史編纂の仕事をされていましたが、そこでブラントンに行き当たり、当館にも資料調査に見えていました。そして、明治初年のブラントン時代とその後の煉瓦造下水管の三田善太郎時代を中心にはじめられ、当館の紀要にも発表していただきました。(横浜開港資料館紀要 第三号「横浜の初期下水道」) 大槻さんは、早稲田さんを通じてお付き合いさせていただくようになつたのでしたね。

大槻 私とはパイプの博物館の頃から一緒に、関心を持つ様々な分野の人たちが集まって顕彰し、情報交換しようという会でして、早稲田さんたちと作つた会です。

——ブラントンのお墓がわかつたのも、ウォーレス博士の力によつたのですね。

大槻 もともとブラントンの子孫だと思つていたこともあり、熱心にブラントンの調査をしてくれたので、日本人では調べ切れないこともわかり、お墓の割り出しもできました。五年前の夏にウォーレス博士の案内で、ロンドンのウェストノーウッド墓地の埋葬地を見に行きました。そこには墓石も、訪

れる人もなく、草木が生い茂り荒れ果てていました。一〇〇年以上昔のことではありますが、日本にあれだけの貢献をしてくれた人の墓が、こんな状態では申し訳ないという気持ちを抱いたものです。そこで横浜市にブラントンの顕彰をしたいと申し入れたところ、横浜商工会議所、土木学会なども賛同し、記念事業を行うことになりました。墓碑建立やセミナーのほか、横浜では墓碑建立やセミナーのほか、横浜公園への胸像、吉田橋への記念碑の建立などが行われることになりました。

大観 大変うれしいことです。もう一つ灯明台役所(灯台寮)跡地の保存

のことが気がかりです。

— 中区北仲通の、現在第三管区海上

保安本部のあるあたりですね。

大観 横浜が開港され、新技術が入ってきました。その流入経路としては、

横浜製鉄所や横須賀造船所などがあげられます。最も注目されるのは、横

浜灯明台役所であり、日本の技術史に

とて記念すべき地だといえます。灯

台記念公園のようなかたちで整備され

ると良いのですが。現在も、当時の遺

跡が残っています。

— どういうものがあげられますか。

大観 大岡川に面した護岸や突堤、ク

レーンの台座などです。日本最初の金

属レールも発掘されています。特に護

岸と突堤は、伊豆石のカラ積の布積と

いう珍しい工法で造られており、かつ

ては関内の四周にめぐらされていたのですが、今ではここでしか見られない貴重な遺構です。



大岡川の伊豆石石積護岸

— 明治四年五月に開校した、土木建築学などを教授した学校ですね。

大観 ブラントンが、かねてから進言

を行っていたのを、灯明台担当となっ

た佐野常民(のち灯台頭)が賛同し、

開校したのですが、西山憲を校長、築

造方のパリーを教頭にすえ、寄宿舎

を設けて学生を募集しました。講義内

容は、初期は土木工学教授の面が強かつたのが、のちには灯台守養成の方に重

点が移り、「土木工学教授」は明治七

年には工学寮に併合されることになり

ます。ただ、灯明台役所の隣接地に開

校したとされていますが「隣接地」の

具体的な場所がはっきりしないのが残

念です。

— 展示の準備の調査をしていて、いくつか疑問も出てきました。慶應二年の改税約書に基づき、開港場の貿易を支える施設として、洋式灯台を設けることが定められたのが、日本における洋式灯台建設の始まりですが、日本側からは、灯器・機材八基分を発注し、次いで設置のための技術者派遣を要請します。この要請をイギリス公使ペークスは本国政府に伝えますが、その際

「日本政府は、開港場の道路・下水建

設の技術者も欲している」と書き加え

ているのです。そこで、ブラントンの雇入れ契約にも灯台建設だけでなく、

開港場の土木工事に関与する条項が入

り、横浜のまちづくりをすることにな

りました。なぜペークスが直接日本側

が言っていないことを書き加えたのか、興味ある問題です。

大観 慶應二年には大火もあり、都市

が集中して建てられていたところで、

その中のどれかの校舎を使っていたこ

とも考えられます。いわば当時の文教

地区で、その後横浜商業学校や、横浜

小学校も建てられた地区ですから、修

技校の所在地の可能性も高いでしょう

ね。

大観 修技校の意義が後世言われない

のは、修技校で育った人たちがその後

どうなったか、分からることはもちろ

りますね。工部省工学寮に併合された

修技校は、その後工部大学校、帝国大

学校工科大学という流れになっています。

大観 修技校の意義が後世言われない

のは、修技校で育った人たちがその後

どうなったか、分からることはもちろ

りますね。工部省工学寮に併合された</p

のでしよう。しかし日本政府は、それを名乗ることを許さなかつたのでしょうか。

——ブラントンの手記「バイオニア・エンジニアリング・イン・ジャパン」の中で、日本人の接遇がだんだん変わつてくると書かれています。大槻 技術者も増えてきて、だんだん待遇が悪くなつてくるのですね。

——ブラントンの手記が翻訳され、(『お雇い外人のみた近代日本』徳力真太郎訳 昭和六一年 講談社学術文庫所収)おかげで明らかになつたこともたくさんありますが、逆に疑問も出てきました。その一つが、伊王島灯台の問題です。

大槻 ブラントンは着任した一八六八年暮に、灯台予定地視察の航海に出ます、長崎にすでに鉄造の灯台が建つてゐるのを目にしたと、手記に書かれています。そのことを調べてみたところ、長崎県立図書館で「外務局灯明台一件」という長崎奉行所の記録を見つけることができました。

——大槻さんの関心は、日本最初の鉄造建造物は何かということだったのでですか。

大槻 その時はそんなつもりはなく、ブラントン以前にすでに鉄造の灯台ができていたことに驚いて、調べ始めたのです。慶應元年五月に長崎在住の領事が五カ国連合で、伊王島に灯台を造ることを申入れ、その年の八月にグラバー商会を通じて、機材をイギリスに発注し、長崎製鉄所が組立てを行つた

もので、ブルークルによる布告が出されたのが慶応四年七月十三日です。布告をもつて完成とすれば、日本最初の鉄橋とされてきた、長崎の中島川に架かるくろがね橋の完成は、同じ年の八月一日ですから、鉄造構造物としては、伊王島灯台の方がほんの少しですが早いということになりますね。完成の時点を現場引き払いの時とすれば、さらに一月ほど早くなります。

——その後伊王島灯台は、ブラントンにより手を加えられるのですが、どの程度だったのか。伊王島灯台には、記念館がありますが、そこに大槻さんが言われた最初のものと、ブラントンが改築したものとの二つの模型を並べて展示しています。それによると、灯器は別として、塔体はほとんど変わっていないという印象を受けました。

大槻 長崎に進出した、上海の造船業者ニコルソン・ボイド社が出した見積りに図面が付いているので、模型はそれに基づいたのでしょうか。古い方にはレンズを掃除するための足場がなく、つかまる棒があるだけです。風の強い日には、恐かったでしょうね。

——灯台だけでなく、早稲田さんが調べていた、横浜の下水道の陶管をどこに造ったかということも、考え直さなければならなくなりました。

大槻 真っ黒い管が開港広場から発掘されていますが、あれがブラントンが輸入して、敷設したものではないので、いえ、あれは刻印がはつきり付い

ていて、日本製であることが確認できます。しかし製造業者に関する資料はありません。あまりありません。ブラントンの手記にはいろいろ書かれていますが、それにはいろいろ書かれていますが、それが当時の史料で検証するため、水道や下水道の計画書を調べました。そこから手記には、はつきりと書かれていますが、早い時期が確定できるようになつたものもあります。

大槻 そうすると手記にもあるように、日本製の土管を使つことになりますね。手記は、亡くなる直前に書かれたもので、二〇年以上も前のこと思い出しながらなので、思い違いをしている部分も多いですね。

——ところで大槻さんからは、これまでいくつか資料を寄贈していただいていますし、今回の展示にもお持ちの資料を出陳していただいている。その一つに灯台寮の構内から昭和五一年に発掘された資材運搬用のトロッコのレールがあります。

大槻 あれは、ブリッジ・レールとよばれる特殊なもので、線路と平行に枕木を置く必要があり、枕木に直接止められるようにしたものです。一般的の地面の上では、普通の双頭レールを使い、橋の上ではこのレールを使い、混用をしたと言わわれています。

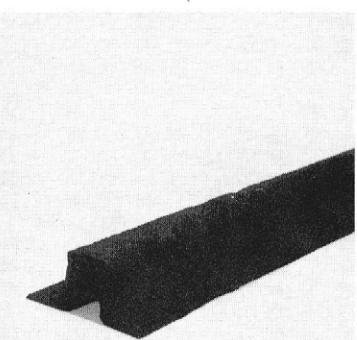
大槻 ええ、ヤード当たり二四ポンドと小型ですから、この上を走つたのは、トロッコだったでしょう。突堤とクレーンとトロッコは、重くて、もろくて、壊れやすい灯器を扱うには、絶対必要

なものですから。経費支出の帳簿によると、明治二年一月以前には敷設されています。しかし製造業者に関する資料はあります。これが日本最初の金属レールであることは間違ありません。

——ブリッジ・レールを使う必要性はどういう点にあつたのでしょうか。大槻 もし、双頭レールを使うと受け取るために大きな金物が必要ですから、人がトロッコを押すのに具合が悪いです。しかし、断面が帽子型をしているので、枕木に止めるのにも安定が良いこともあります。

——伊豆下田沖の神子元島(みこもとじま)灯台の絵も出陳していただきました。

大槻 これには、日本伝統の工事中を知らせる白い旗が掲げられています。石材運搬の押送船や滑車を使って荷揚げする装置も描かれています。浦賀の灯明台によく似た形で描かれているのは、仮灯台でしょうかね。



ブリッジ・レール

——灯台建設の大変さが良く描かれていますね。ブラントンは助手として、マクビン(C.A.McVean)とブランデ

「資料が語る横浜の百年」展余話

「御開港横浜大絵図」と

「横浜弋覧之真景」と

宝善堂の出版案内

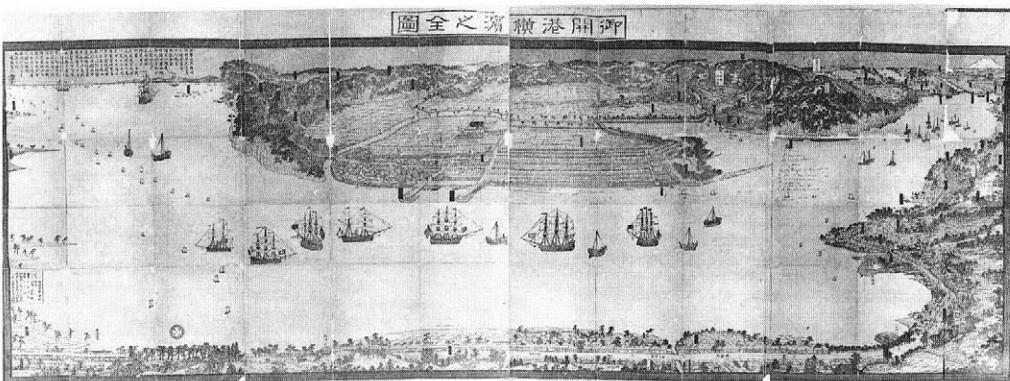
前回の展示「資料が語る横浜の百年」の「英学と日本学」と題するコーナーに、「商貼外和通韻便宝」と「和英通韻以呂波便覽」という二冊の本を出品

した。平易で実用的な英語の学習書である。前者は江戸の版元宝善堂の出版、序文の日付は安政七年(一八六〇)二月、和文は書家の巣鴨湖、欧文は「阿蘭陀コンシユルフローレンド」なる正体不明の人物が書いている。後者は坂本竜馬の創設による土佐の海援隊が出版したものだが、内容は前者と全く同一である。つまり海賊版であろう。当館にはもう一冊、前者の再版本がある。その末尾に次のような出版案内が付されている。

①玉蘭斎貞秀画 御開港横浜大絵図 初編 全一面—此図ハ東京来往の人、東海道小安村より横浜眺望の真景也、今般初て此図蒙、官許開板の嚆矢ならん
②同上 同 再版 出来 同—此図ハ万延元申年開板、微細なるに、日を追て田を埋め山を開くこと歲々にして、原板摩滅となりし故、今般再版の折か

▲(図版1)シモンズ医師愛用の絵図

「御開港横浜大絵図」初編



ら、外國館其外新らたに開けるを増補して微細にあらへし、図を以て遠路の嘶語となるべき世に無類の勝図たり。同上「御開港横浜大絵図」二編全一冊とす、又自國の方を三篇とし近刻すとなし、左右に分ち、外國人乃方を二面—此図ハ右に云大図の初篇に題す、左にまびらかにして、御運上所を中英をつまびらかにして、御運上所を中英

篇とす、又自國の方を三篇とし近刻すとなし、左右に分ち、外國人乃方を二面—此図ハ右に云大図の初篇に題す、左にまびらかにして、御運上所を中英をつまびらかにして、御運上所を中英

「御開港横浜大絵図」初編

出版案内記載の①は、内題を「御開港横浜之全図」といい、やはり前回の展示に出品された(図版1)。幕末期の代表的な浮世絵師で、精密な絵図の作成に定評のある橋本玉蘭斎貞秀の描いた横浜最初の本格的な鳥瞰図である。

左上の肩竜散人なる人物の贊には「安政六年己未晚冬下浣」の日付とともに、「頃者。書肆宝善堂者。製横浜圖以示余。余展而觀之。山形・地勢・官署・洋館及市塵。縱横向背。歷歷在目」と記されている。また、先の出版案内の②「再版」の宣伝文によつて、万延元年(一八六〇)中に刊行されたことが知られる。これだけ見ると、安政六年未に原画が描かれて、翌万延元年

早々に出版されたかのように思われるが、そうだろうか。外國人居留地と山手の麓を分かつ運河堀川が竣工していことがあるから、描かれている内容

とがあり、その袋に「万延元年庚申八月」と明記されていたのである。つまり、肩竜散人が贊を求められた時に見た図と、実際に出版された図の版下との間には半年程の開きがあり、その間に描き直されていたのである。正確な描写に撤しようとする貞秀の態度がこんなところにも表れている。

シモンズ医師愛用の絵図

「御開港横浜大絵図」は当時のベス

トセラードたらしく、各地の博物館や図書館に所蔵されており、個人蔵も多い。その意味では珍しいものではない。当館も三部所蔵している。前回出品したのは、故P.C.ブルーム氏のコレクションに含まれるもので、神奈川の成仏寺に My Temple in Kanagawa. 運上所構内に My House. 居留地中に The Position of my new lot といつた書き込みがあり、前から気になっていた。

成仏寺の住人といえば、ヘボン夫妻をはじめ、S.R.ブラウン一家、シモンズ夫妻など、キリスト教宣教師の名が浮かぶ。そのなかには植物学者にして文筆家であり、また「アメー」ことウォルシュ・ホール商会の設立者の一人、フランス・ホールもいた。その滞日中の日記がアメリカのクリーブランド公共図書館に保存されており、数年来カリフォルニア大学のノートフェルファー教授が研究されている。二年前、氏が来日された折、二人でしげしげとこの絵図を眺めたことがあった。

この疑問は簡単に解決した。以前、古書展にこの図が袋付で出品されたこ



►(図版2)「横浜大観之真景」(改訂版)

ホールの日記と照合すると、My House は万延元年秋に彼とシモンズが、ボイドから譲り受けた一時住んだ外国人貸長屋の一角、my new lot はシモンズが医院を開く八一番に該当する。筆跡はホールのものとは違うという。

求めるものの輪郭がはっきりしてく ると、不思議とそれは発見されるものなのだ。よく見ると、題簽に小さく D.B.S と記されていたのである。い うまでもなく、D.B.Simmons のイニシャルである。ちなみにホールの日記によると、シモンズとホールが神奈川の成仏寺から横浜に転居したのは、一八六〇年(万延元年)十月二十二日のこ とであった。この頃、シモンズはこの絵団を片手に、神奈川と横浜の間を頻繁に往復したことだろう。

シモンズは、一八五九年(安政六年)十一月一日、オランダ改革派教会ミッショーンの宣教医として、同僚者のS.R.・ブラウンやホールとともに来日した。横浜移転の前後にミッショーンから離れ、医師として開業したが、日本の水が合わなかつたらしい夫人の後を追つて、一八六三年上海へ、翌年にはアメリカへ帰った。

彼はその後フランスとドイツへ渡つて本格的に医学を勉強したらしい。明治二年(一八六九)再来日、横浜の十全医院専属の医師として働き、ヘボンとともに名医と謳われた。十三年勲五等双光旭日賞を受賞、十五年帰国。ところが十九年、「愛するこの土地に余生を捧げる決意」(The Japan Weekly

Mail, 1889.2.23) で、年老いた母を伴はれ、三度び来日する。晩年には、かづドから譲り受けたことのある福沢諭吉の世話を三田に住み、「時事新報」を長屋の一室で三田に住み、「時事新報」をが医院を開く八一番に該当する。筆跡はホールのものとは違うという。

求めるものの輪郭がはっきりしてくると、不思議とそれは発見されるものなのだ。よく見ると、題簽に小さく D.B.S と記されていたのである。い うまでもなく、D.B.Simmons のイニシャルである。ちなみにホールの日記によると、シモンズとホールが神奈川の成仏寺から横浜に転居したのは、一

八六〇年(万延元年)十月二十二日のこ とであった。この頃、シモンズはこの絵団を片手に、神奈川と横浜の間を頻繁に往復したことだろう。

シモンズは、一八五九年(安政六年)十一月一日、オランダ改革派教会ミッショーンの宣教医として、同僚者のS.R.・ブラウンやホールとともに来日した。横浜移転の前後にミッショーンから離れ、医師として開業したが、日本の水が合わなかつたらしい夫人の後を追つて、一八六三年上海へ、翌年にはアメリカへ帰った。

彼はその後フランスとドイツへ渡つて本格的に医学を勉強したらしい。明治二年(一八六九)再来日、横浜の十全医院専属の医師として働き、ヘボンとともに名医と謳われた。十三年勲五等双光旭日賞を受賞、十五年帰国。ところが十九年、「愛するこの土地に余生を捧げる決意」(The Japan Weekly Mail, 1889.2.23) で、年老いた母を伴はれ、三度び来日する。晩年には、かづドから譲り受けたことのある福沢諭吉の世話を三田に住み、「時事新報」を

舞台に、欧化主義を批判して日本の伝統文化を称揚する論陣を張った。二十二年、母に先立つて死去、横浜の山手外人墓地に埋葬された(のち東京青山墓地に移葬)。その功績のわりに忘れられがちな人物としてかねがね注目していただけに、先の発見は嬉しかった。

(シモンズについては、小沢三郎「明治文化とドクトル・セメンズ」(尾佐竹猛編『明治文化の新研究』所収) 参照)

横浜大絵図構想と「横浜大観之真景」

宝善堂の出版案内に戻る。(2)の「再板」は「増補再刻版」で、慶應元年(一八六五)後半から二年の間に出版された。また、(3)「二編」の宣伝文による猛編『明治文化の新研究』所収) 参照)と、それは横浜の街並を左右に分かち、「外国人乃方」を描いたもの、「自國の方」は三編として近刻するという。

神奈川県立博物館に所蔵される「御開港横浜大絵図二編 外国人住宅図」が二編に該当することは明らかである。描かれている内容からみて、文久二年(一八六二)初頭の出版と推定される。では、三編は実際に出版されたのだろうか。

粘着質で知られる貞秀のことだから、準備は進めていたに違いない。しかし、そこには慶應二年末の大火灾が勃発したのが原因であつた。描かれるべき街の大半が焼失してしまつたのである。こうして貞

秀の横浜大絵図構想は完結することができなかつたのだと思う。

横浜の街の再建は急速に進むとともに、明治維新の後、新政府によって、灯台や電信・鉄道など、新文明の摸倣の窓口としてより一層重要な役割を与えた。横浜は貞秀の創作意欲を引き付け続けた。慶應四年にはすでに、横浜の版元新栄堂から「大港横浜之図」が出版されている。明治三年には、やはり横浜の版元師岡屋伊兵衛から「横浜明細治文化とドクトル・セメンズ」(尾佐竹猛編『明治文化の新研究』所収) 参照)が出版され、翌四年(一八七一)春、師岡屋から「御開港横浜大絵図」を凌駕する規模と精密さを備えた「横浜式大絵図」が出版された。これには、左端に別枠で描かれた「かねの橋」(吉田橋)をはじめ、灯台、京浜間蒸氣船、街灯柱、競馬場など、新文物がふんだんに盛り込まれている(図版2)。また、「六十五老夫 橋本玉蘭齋先生図画」の記載から、当時の貞秀の年齢が判明する。

明治初年の横浜の変貌は激しく、老いてなお探求心旺盛な「六十五老夫」に満足の訪れることがなかつた。版木の一部を作り替え、横浜駅、ガス会社、水道会社等の新施設を描き加えていったのである。そのことは当館が最近入手し、前回の展示に出品した改訂版の存在によって判明した。このような驚くべき執筆力によって、貞秀は、誕生から成長にいたる時期の横浜の肖像画家にして伝記作者となりえたのである。

外国人商館の日本人番頭（その1）

はじめに

開港場横浜の外国人と日本人との交際の軸になったのは貿易取引であった。開港当初の両者の取引の様子について、ことばがよく通じないゆえの珍談がさまざまに伝えられている。

しかし、横浜での貿易取引の具体的な姿は、開港後急速に変化していった。明治中期ともなれば、市中で外国人と日本人が貿易取引の交渉をしているというイメージは、全くの誤りではないものの、極めて不十分なものである。

英一番館の生糸荷造風景(『開港と生糸貿易』より)

本稿では、生糸貿易に限定し、いくつかの資料によって横浜での生糸取引の実像を探る。昨今における実像確認をおろそかにした「ヨコハマ」イメージの氾濫への一矢となれば幸いである。

毎日の生糸商売

明治中期の市中での生糸貿易取引の実態については、小林綾太郎著『横浜蚕糸貿易事情』(明治二四年、発行者小川重太郎)が詳しい。この本は、当時福沢諭吉が主筆を奮った新聞『時事新報』の連載記事(「横浜蚕糸貿易事情」明治二三年一月三日～三月一七日に連載、中断あり)をまとめ直したものだが、連載記事に書かれながら本に載らなかった部分がある。まず、この連載記事を、筆者の解釈によって現代語に書き改めつつ、紹介してみよう。

最初は、毎日の生糸取引の様子についてである。

毎日の商売は、たいてい午前九時が始まり、午後五時に終わる。

まず、午前九時頃に、外国商館の番頭たちが、生糸問屋(日本人の横浜生糸商人=横浜生糸売込商)の各店を訪れ、生糸の在庫や新着荷を確か



め、店にある生糸を見て値段を聞く。注文どおりの品物があつて「手合」(テアワセ=仮契約)となれば、商館番頭は、さらに、一部の生糸を見本として出せたり、「引込」(ヒキコミ=仮契約物件の生糸全体の外国商館への運搬)させたりする手筈を決める。そして、その店の取引状況や、他の外国商館との契約状況などの情報を探ってから、外国商館に帰って、館主に報告する。

生糸問屋の組織・店員

横浜市中の日本人街と外国人居留地とは、日本大通で二分されていた。明治中期ともなれば、毎日日本大通を切って商売に往来したのは、外国商館の番頭や生糸問屋の番頭・手代などであった。

ところで、この頃の生糸問屋や外國商館では、どのくらいの数の人が、どのような仕事をしていたのだろうか。第1図は、大きな横浜生糸問屋の店の組織図で、やはり小林綾太郎の新聞記事をもとにしたものである。小林は次のように説明している。

店員のトップは主管番頭で、かれは営業全般に関する事務を指図するが、金融などについては店主と相談する。この下に、営業の内務を担当する店方と、外国商館関係を担当する売込方の二組織があり、さらにこれが各係(当事の「××方」)に分かれている。これらの係が番頭・手代と呼ばれる人々で、この他に小僧・丁稚と呼ばれる人々

と外國商館の間を往来する。

以上のような毎日の外國商館と生糸問屋の番頭・手代の往復は、生糸に限らず横浜の貿易業全体の通例で、人々はこれを「商館マドロス」と言う。

(以上、二四年二月二十四～二六日の記)

「毎日三々五々隊ヲナシテ」生糸問屋と外國商館の間を往来する。

問屋の番頭・手代の往復は、生糸に限らず横浜の貿易業全体の通例で、人々はこれを「商館マドロス」と言う。

店員のトップは主管番頭で、かれは営業全般に関する事務を指図するが、金融などについては店主と相談する。この下に、営業の内務を担当する店方と、外國商館関係を担当する売込方の二組織があり、さらにこれが各係(当事の「××方」)に分かれている。これらの係が番頭・手代と呼ばれる人々で、この他に小僧・丁稚と呼ばれる人々

がおり、大きな横浜生糸問屋では四〇人前後の人が働いている。

取引高の小さい店の場合は、これより人數が少なく、一人の番頭が数役を兼ねる。大小あわせて、このような生糸問屋が約三〇ある。中には、文明風の会社組織の店もあるが、ほとんどの店は、縞の羽織・前掛け姿の店員が店頭に座って仕事をするような、昔風の「お店向」(オタナムキ)の店である。

いっぽう、主要な取引として生糸を取り扱う外国商館は二〇店余りある。外国商館の店員は数がずっと少なく、多くて一〇名程度であり、商館の館主は、問屋の店主とは異なり、契約・検査などの実務を行ったり、会計を兼ねたりする。

外国商館の店員は、日本人が多い。外国人が日本人で、書記は西洋人が日本人である。外国商館は、問屋の丁稚の代わりに、必要に応じて臨時の労働者を雇用する。〔以上、二四年二月二四日記事による〕

番頭・手代の経歴・教育

また、問屋・商館の番頭・手代の人物像について、記事は次のように語る。

商業の駆け引きには実務の老練が第一だが、学問も必要である。とくに、外国人相手の貿易事業ではなおさらで

ある。

しかし、積年の習慣はすぐには変わらない。現在の生糸問屋の番頭・手代は、みな丁稚小僧の出身で、創業時に店主と労働を共にした者が多く、実務経験は豊富だが、八九割は教育を受けていない。したがって、文明流の店でも旧弊はなかなか改められない。

外国商館の番頭も同様である。かれらは、生糸の貿易業務に長く従事した者か、以前製糸事業に關係して生糸の鑑定能力がある者か、あるいは倉庫係などから年功を積んだ者か、である。番頭以下、外国商館にいながら外国语が分かるものはほとんどない。これが日本語に通じているからである。倉庫係・計量係などに中国人が多く用いられるのは、かれらが欧米語にも日本語にもよく通じているからである。〔以上、二四年二月一三日・二四日の記事による〕

外国商館の組織・店員

以上は小林綾太郎の連載記事の内容の一部であるが、重要な点として次の二点を指摘できよう。

①日本人の生糸問屋は、外国商館より店員数において規模が大きかった。

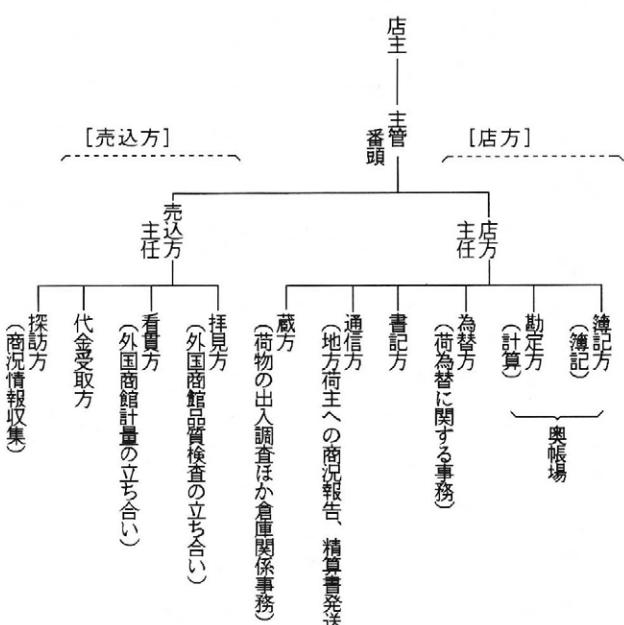
②外国商館の店員は日本人が多く、生糸取引の実務の中心は日本人番頭であった。

易新聞社)が貴重である。同書所載の外国商館のリストには、各商館の商會名・館主名のほか、詳細な取扱品目と、「売係人」「買係人」という表現で取扱品目別の担当者が記されている。これを資料として、生糸を取り扱った外国商館のうち、いくつかの有名な店の組織を、第2図の日本語部分に示してみた。

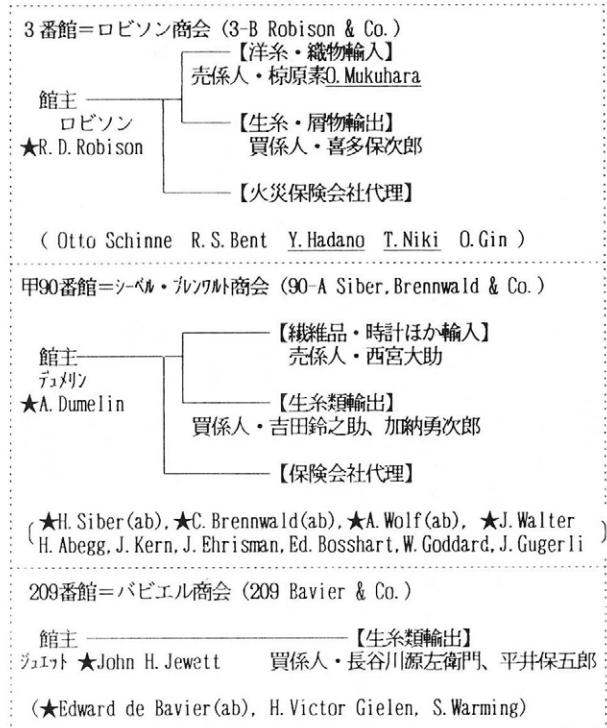
①については、この他の資料として、一八九三年刊行の『横浜貿易捷径』(発行者日野清秀、印刷発行所横浜貿

例え、一番館(兼二番館)ジャーディン・マセソン商会では、館主ウォルターの下に、業務別に三人の「支配人

第1図 横浜生糸問屋の組織



第2図 生糸を取り扱う主な外国商館の店員(1893)



資料) ①『横浜貿易捷徑』、②"The Japan Directory"(1893年版)
注) ②にあって、①に該当する名がないものを()内に記した。
★は②で名が誤りを下げて書かれていない者、abはabsent横浜不在

いる人名を追加したのが、第2図のアルファベット部分である。例えば一番館の場合、「横浜貿易捷徑」記載の外国人四名のほかに、ディレクトリーにはさらに九人の外国人が載っている。しかし、逆に前者記載の中国人・日本人は、後者にはまったく載っていない。外国人用に作られたディレクトリーは、商館にいた日本人をかなり省いている、と見てよいようである。しかし、中には、九三番館のシルク・バントー=ヤチモト(橋本の誤りか)

というような記載もあり、外国商館の日本人番頭の存在を裏付けている。また、どちらの資料も、丁稚・小僧・使などの地位の低い店員については、記載を省略したであろう。

一番館の場合、部門が多く、館主「支配人」—売買係人の三段の組織構成である。しかし、「横浜貿易捷徑」と「ジャパン・ディレクトリー」を一覧すると、このように組織が大きい商館は、横浜ではほかに見当たらず、一番館は例外中の例外であることが分かる。

『横浜貿易捷徑』の商館に関する記載から判断する限り、他の生糸を取り扱う外国商館は、数種類の輸入品の販売部門と輸出生糸の購入部門の二部門を持つものであった。また、生糸取扱商館に限らず、外国商館全体でも、ほぼこのような単純な組織であった。

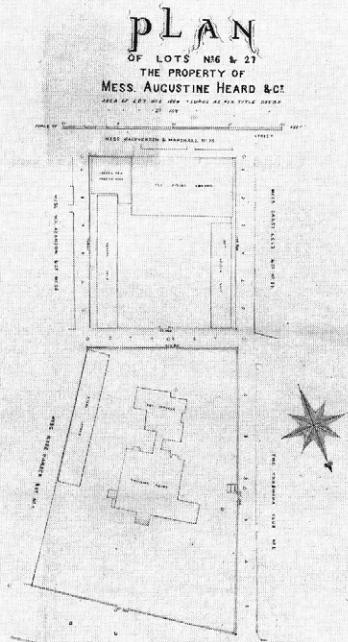
しかし、生糸取扱商館を含めて、外國商館の經營は、取引相手である個々の生糸問屋(生糸売込商)や綿糸織物問屋(綿糸織物取引商)などの横浜商

人に比べれば、少ない人數ながら、ずっと多角的な経営をしていたと言える。どちらかの特定品目を専門にしているからである。また、外国商館は、神戸や上海・香港にも店を持つてゐるのも少なくない。「生糸問屋」に対応するような、生糸取扱外国商館の固有名称がない所以でもある(続く)。(井川克彦)

資料よもやまばなし

ハード商会横浜店の平面図

ハード商会 Augustine Heard & Co. は、開港と同時に横浜に進出してきた典型的な同族会社で、一八四〇年から約三五年間、中国を本拠に営業した。横浜の外國商館のなかでは、開港当初に主流だった「中国系商社」にあたる。ハード商会の資料はハーヴィード大学ベイカー図書館に保存されているが、一昨年、市制施行百周年・開港一三〇周年を機に、ハード商会横浜店の地所の平面図一点と、同じく地所関係文書十点が当館に寄贈された。



地所として「か所が描かれ、それぞれ「地券のとおり」に坪数が記入されている。下の区画は海岸通りに面した居留地六番（現ザ・ホテル・ヨコハマ所在地）で、一〇六四坪（約三五一一〇平方メートル）。住居・事務所・石造倉庫がある。上は水町通りをはさんで南側の二七番で、五五四坪（約一八三〇平方メートル）。茶の再製工場・茶の梱包所・木造倉庫がある。

外国商館の図面は珍しく、この平面図も貴重なものであるが、残念ながら年代を欠く。また、ハード商会がこの二か所の地所を得たのはいつかという問題もある。現時点ではまだ調査不十分であるが、寄贈された文書を手がか

したものである。まだ地番や地券も定まらず、海岸通りもない時期である。海に面した区画とその南に道をへだてて隣接した二か所とはわかるものの、これだけでは場所の特定は難しい。

別の文書、文久元年七月三〇日（一八六一年九月四日）付けの神奈川奉行所の地券（英文、写し）は、地券や地番がすでに使われていることを示す、かなり早い時期の資料である。ここに二七番の土地がハード商会代理人フーパーの借地としてでてくる。その翌年二月、フーパーが六番と二七番の地券を受けとった旨の書簡があり、両地所

ハード商会の仕事もしており(『アメリカ彥藏自伝』)、のちにはハード商会の代理人・店員となっている。

さて、ハード商会の地所関係文書のなかで最も時期の早いものは、一八六〇年六月一八日付けと同二〇日付けの土地譲渡証書(いずれも写し)である。一八五九年にT.H.King(当時ハード商会代理人)とF.W.Cheneyが幕府から借りた土地の権利を、それぞれハード商会のA·F·ハード(上海)に譲渡

さて、一八七〇年のプラントンの居留地地図で当該地をみると、また建物が違う。ハード商会は一八六六年一一月(慶応二年一〇月)の横浜大火で消失しており、プラントンの地図にあるのは再建された建物ではないか。とすれば、この平面図は一八六四一~一八六年の時期のものということになる。

その後ハード商会は衰運をたどり、一八七五年には閉業。再建をはかったが、一八七六年には完全に失敗し、横浜からも姿を消した。(伊藤久子)

しかし、地所は同じでも貞秀の図と
今回の平面図では建物の配置はまったく
異なる。平面図では、右隣の五番には
横浜「ユナイテッド」クラブがある。
同クラブは一八六四年に同地に移って
いるので(『横浜もののはじめ考』)、
それ以降の図面である。左隣の七番には
ロス・バー・バー商会があるが、同社
は一八六八年版ディレクトリではすで
に一八番に移転している。したがって
この平面図の作成の時期は一八六四年
から一八六七年の間にしばられる。

がフーパー名義で、実質的にはハードの借地になつたことを推測させる。二七番は一八六三年九月にはハードに譲渡されており、六番も同様の経緯をたどつたのではないか。

ちなみに貞秀の「外国人住宅図」やディレクトリなどをつきあわせてみると、一八六一年頃には、フーパーらハード商会の代理人や店員が、六番と二七番に相当する地所に商館と住宅を構えていることがわかる。

りに推定してみることにする。

ハード商会の横浜進出はすばやかつた。開港前日の一八五九年六月三〇日、米艦ミシシッピ号で公使ハ里斯とともに神奈川領事ドーレが黄兵に射殺して

がフーパー名義で、実質的にはハードの借地になったことを推測させる。二七番は一八六三年九月にはハードに譲渡されており、六番も同様の経緯をたどつたのではないか。

閱覽室

横浜には、明治時代から昭和初期に建てられた建築物が今も残っていますが、そういったものに関心をもって閲覧室を利用する方も多いようです。今回は、神奈川県の近代建築物について書かれた図書を紹介します。



行事開催予定（平成二年）

- (1) 「R・H・ブラントン—日本の灯台と横浜のまちづくりの父」 10／
年記念事業 灯台建設や外国人居留地の造成、築港計画に活躍した御雇技師
ブラントンの業績を紹介する。

(2) 『横浜と英仏駐屯軍』(仮題) 10／
1／29／4／26 英仏軍隊は、生麦事

▼講座

居留民保護・居留地防衛のため横浜の山手に駐屯することになった。英仏のアジア政策と日本政府の対応、外国軍隊駐留の実態と横浜への影響、日本の軍制改革への影響、撤退と日本の主権回復など、さまざまな面から英仏駐屯軍の実像を紹介する。

○一 残照
神奈川の近代建築
（朝日新聞横浜支局編 有隣堂 昭和五七年五月 B5判）

○一 残照 神奈川の近代建築

○ 残照 神奈川の近代建築
(朝日新聞横浜支局編 有隣堂 昭和五七年五月 B5判)

○「横浜・都市と建築の100年」

(横浜市建築局企画管理課編・発行)
九八九年四月 A4判 二〇三頁

座(2)
「横浜と英仏駐屯軍」展開催記念講
座 2 / 29 から 3 / 28 の毎週土曜全
ての展示のもととなる資料を素材と
して、幕末期、攘夷の激化により駐屯
した外国軍隊の実態、開港場や政府と
の関係などを明らかにする。 講師: 等

(2) 沿岸海運 小風秀雅 全五回各午後2時から 往復はがきにて全五回分一括受付 受講料二五〇円
座 2／29から3／28の毎週土曜 全五回 展示のもととなる資料を素材として、幕末期、攘夷の激化により駐屯した外国軍隊の実態、開港場や政府との関係などを明らかにする。 講師 東

した外國軍隊の
の関係なども明

- ▼歴史講演会

三
二
情
報

- 以上のはが、横浜の近代建築に関する情報ファイルを当館で作成しており、これらは全て閲覧室開架書架にあります。ご利用ください。（上田由美）

○『横浜：建築百景』

○「横浜・建築百景」
第一章横浜近代建築史、第二章人と建築の風景、第三章横浜の都市像をさぐるという内容になっている。巻末に横浜建築家事典稿、付録として横浜の外国人建築家年表を付している。